

## 【高校生の部】審査員賞

『傲慢と善良』（辻村 深月／著）

県立八戸高等学校 2年 石丸 綾音

会話の中で、相手を傷つけまいと嘘をついてしまうことがある。そのあとは決まって申し訳なさに襲われて、はっきりしない自分が嫌になる。そういう私の「偽善」を肯定してくれたのがこの小説だった。恋愛ミステリというジャンルでありながらも人間の正負の両方の性質が現実味を帯びていて、いつの間にか世界観に没入していた。親子や友人、同僚など様々な関わりの中で登場人物たちの「良かれと思って」が重なり合い、事件へと繋がっていく。しかし最後はあたたかに、私たちの「善」を後押ししてくれる、そんな物語。人と接し、人を選び、人に選ばれる。正解が分からない人との関わり方に悩む全ての人に読んでほしい一冊だ。

『せんせい。』（重松 清／著）

県立弘前南高等学校 1年 佐藤 優羽

私はこの本を読んで、人間は誰しも完璧ではないということをととても感じました。章ごとにお話は変わっていきませんが、どのお話も教師と生徒の絆がすごく伝わってきます。私は、先生というのは立場も違うしとても距離が遠い存在でした。ですがこの本を読んでみて、先生にも、人間らしい悪い考えや思い出したくないような苦い過去があるというのを知り、たしかに先生だって人間だよなど、先生に対する考え方が変わりました。

私は、自分の悪い所があると他人と比べ落ち込むことが多いですが、この本は自分だけでなく、他の人だって完璧じゃないと励ましてくれるような優しさがあります。ぜひ、色々な人に読んでみてほしいと思います。

『聲の形』（大今 良時／原作、倉橋 燿子／文）

県立八戸商業高等学校 1年 田中 ほなみ

私の後輩には耳が聞こえづらい子がいました。耳が聞こえないのだからその子には優しくしなければならないと思っていましたが、会話がすれ違ったり意思疎通が上手くいかなかったりするとイライラしてしまう自分がいました。だんだんとそんな自分のことが嫌になっていきました。そんな時にこの本を紹介され、読んでみることにしました。それまではハンディキャップのある人には優しくしなければならないと思い込んでいましたが、ハンディキャップがあろうがなかろうが、「その人」自身をよく見て、一人一人の個性を尊重していくことが大切なのだと気づくことができました。思い込みを手放し、今後も人と人との関わりについて考えていきたいです。